

## 台湾手話と中国語対应手話 (Signed Chinese) の音韻論的比較

リ・シンシェン

(台湾・国立中正大学/嘉義基督教医院)

本発表では、台湾手話と中国語対应手話 (Signed Chinese) の音韻パターンの比較を行う。台湾手話は中国語とは異なる文法システムを持つが、中国語対应手話は基本的に中国語の文法を採用し、ろう者である子供の中国語のリテラシーを向上させることを目的として開発された。しかしながら、中国語対应手話はリテラシーの向上に失敗しているだけでなく、ろう者である子供によく習得されることもできていない。この中国語対应手話の失敗の原因には、子供たちの教師からの入力十分ではないこと、そして中国語対应手話自体の複雑な形態的特性が可能性として含まれる。しかしながら、手話記号内の音韻レベルにおいては、開発された中国語対应手話の手話記号の組み立てが、台湾手話のものと同一かどうかは明らかではない。また、中国語対应手話の手話記号が、台湾手話では当てはまるような自然な音素配列制限に従っているかどうかは明らかではない。台湾手話と中国語対应手話の間での手の形状や一動きのパターンの比較からは、中国語対应手話が、台湾手話と比較した時に、有標の手の形状をより頻繁に採用し、無標の手の形状をよりわずかにしか採用していないことがわかった。中国語対应手話の手話記号は、利き手制約（手の動きを分節するのに、利き手でない側の手を使用する）と、話し手視点（見ている者の視点から漢字を描写する）を台湾手話よりも頻繁に違反していた。これらの違いが、習得者が中国語対应手話の習得することを困難にしているのかもしれない。

利き手制約と話し手視点の違反が習得の困難の原因であるかをテストする目的で、聴者である非手話話者が、動きを作る手の選択と漢字を描写するときの視点に関する選好をテストするための困難性を判断するタスクをデザインした。もう一つの記憶タスクも、デザインされ、それはこれらの制約に違反する手話記号を正確に思い出すのはより困難であるかどうかを見るのが目的であった。これらのタスクの結果は、習得し始めたばかりの習得者にとっては、利き手が動きを作るのが実際に選好されるということを確認するものだった。それにもかかわらず、非手話話者が示したのは、漢字を描写するやり方については、選好が見られないということであった。したがって、手話記号については、話し手視点は支配制約のように自然な減速でないのかもしれない。結果はすべて要約され、中国語対应手話とろう者の教育の設計原則に対する示唆とともに議論される。